

## 第32回 森羅万象匠塾 南天にひろがれ 宇宙ロマン

2019年度 JIA 三重会員研修会「第32回森羅万象匠塾」を令和2年2月7日(金)三重県総合文化センター小会議室(定員42名)にて名古屋大学院特任教授電波天文学専攻の福井康雄先生を招き「南天にひろがれ宇宙ロマン」と題して講演会を開催しました。

天文学とは一部のマニアを除いて一般的には少なくとも私には身近に感じるものではなく難解な講演会になるのではと少々不安もありましたが、専門分野に偏らず誰にでもわかりやすい解説でいつの間にか時間がたつのも忘れてしまう楽しい講演会となりました。

今回はフライヤーを作成し知人を通しての配布、FACEBOOKにて掲示、新聞記事での事前告知等を行った結果、会員以外の参加者も数名参加していただける結果となりました。

ここで福井先生について紹介します。東京大学理学部を卒業後、理学研究科博士課程を修了され、名古屋大学理学部の教授を経て、名古屋大学大学院理学研究科教授となられ、現在は名古屋大学大学院特任教授であり、理学研究科附属南半球宇宙観測研究センター長も務められていました。ご専門は電波天文学であります。また2007年には紫綬褒章を受章されるなど素晴らしい経歴をお持ちです。

現在では専門の電波天文学より星の起源を解き明かす研究を進めながら世界各地で様々な講演をされています。また画家の「西八郎」を叔父に持ち、時間を見つけては絵

画を描く画家としての面もあるそうです。

講演の前半は電波望遠鏡の設置についてのいきさつからはじまり、電波天体望遠鏡施設は当時先進国の集中する北半球にしかなかったが、福井先生は南半球に天体観測施設を作ることによって天文学の飛躍的な解明につながると信じ電波望遠鏡を設置することに至ったのです。

名古屋大学千種キャンパス内にある電波望遠鏡を1996年に空気の澄んだアンデス山脈のある南米チリに移設しました。移設後この望遠鏡は「なんてん」と名付けられ数年で多くの星を発見することにつながりました。

この命名には南の天体「南天」でもありません、**「難を転ずる」**という願いも込められているそうです。

天文学の話ばかりではなく海外出張が多い先生は日本の住空間は海外に比べると明るすぎる(照度)・浴室の閉鎖性など実体験をもとに建築に話を振っていただき私的にはなんと恐縮した気持ちになりました。

講演後半の内容は少し専門的な分野に入り、天文マニアらしき参加者からの質疑のやり取りも熱気あふれるもので内容がわからずとも聞き入ってしまう事も多くありました。

特に印象に残っている内容は地球上にあるすべてのもの我々の存在も宇宙のビックバン(大爆発)により生み出された元素から成り立っているとの事。ビックバンがなければこの世に我々人類も存在しなかったこと。

理解しがたい天体ブラックホールは光をも吸い込む超重力を持ち、その重力から逃げるには光速を超える速度が必要であること。

星の輝きの大小は地球からの距離の二乗に反比例すること。等々、非日常な内容にいつの間にか時間が過ぎました。

最後に20分ほど質問の時間をとっていただき参加者からの素朴な質問にも回答していただきました。

2020 JIA 三重 森羅万象匠塾

開催日時: 令和2年2月7日(金)15時~17時(開場は4:45)  
 会場: 三重県総合文化センター 生涯学習棟4F 小会議室1  
 参加無料 ※定員42名

テーマ「南天にひろがれ宇宙ロマン」

専門は電波天文学。チリ共和国に電波望遠鏡「なんてん」を設置し、星の誕生の現場であるガス雲の観測を行っている。

福井 康雄氏  
 (名古屋大学大学院 特任教授)

1951年 大塚市生まれ。  
 1974年 東京大学理学部卒業  
 1979年 名古屋大学大学院 理学研究科修士修了 理学博士  
 1976-79年 日本学術振興会特別研究員  
 1980年 名古屋大学理学部 助手  
 1987年 名古屋大学理学部 助教授  
 1993年 助教授  
 1996年 名古屋大学大学院理学研究科教授

1984年 フォルボルト財団 研究員 (西独ケルン大学)  
 1996年 日本科学員(非科学振興財団)  
 1998年 小惑星7500委員会  
 "Yasuhiko" (国際天文連合)  
 2001年 宇宙文芸賞(宇宙探検誌)  
 2002年 日本天文学会会友特別賞(日本天文学会) 共著書の1名として  
 2003年 日本天文学会特別賞(日本天文学会)  
 2007年 紫綬褒章

連絡先: JIA三重 研修委員会 阪竹男  
 Phone: 090-1627-6295 email: sakatako.ig@gmail.com

Q: 火星での人類移住計画は可能であるか?。

A: 可能性はあるかもしれないがおそらく莫大な費用が掛かり経済的な問題で現実的ではない仮に移住できたとしても地球ほど可能性の詰まった素晴らしい惑星から脱出する必要性はないと考える。

Q: Ufo は実存するか。

A: 宇宙船が地球に到達するには少なくとも10万年はかかり距離的にも不可能です。

Q: 超光速航法「ワープ」は可能である。

A: あり得ない、そもそも光速よりもはやい速度はありえない。

総じて質疑雑談を交えての気さくな講演会として終えることができました。

最後になりましたが多忙なスケジュールの中、今回の講演会をご快諾いただいた福井康雄先生に深く感謝いたします。

阪竹男(JIA 三重)  
 阪竹男建築研究所

